

お米大乱のスタート年①「16年作況指数「101」」

15年産から始まったお米の価格変動は、農水省がDNA鑑定を絡ませて古米処分をしたことに、米卸が動揺した結果引き起こされた流通の歪でした。これから始まる米変革に向けて、生産者と消費者が価格の動揺に振り回されることのない安定した流通システムが必要であることを痛感したのではないのでしょうか。

15年産も16年産もお米の供給量としては充分安定していると考えられます。しかし今回値下がり傾向かなと思いきや、一転不安定な状況になりつつあります。これも計画外米の増加や古米の流通在庫によるもので、生産量にかかわるものではありません。政府が米流通在庫の下支えから手を引いていくことから考えると、作況指数は今までとは意味合いが違ってくる应考虑すべきでしょう。

農水省が9/10現在で調べた2004年産水稻の作柄概況を101と発表しました。全国平均「**平年並み**」を見込んでいます。前回調査(8月15日現在)では全国的な好天で「**今年の米は豊作**」と言われ、価格下落が予想されていました。

しかし8月以降の台風15、16、18号の影響で、秋田、新潟、山形等、本側の主産地のほか九州なども、冠水や倒伏、潮風害が出ました。この影響で「**豊作**」から「**平年並み**」になってしまいました。秋田は日照不足と塩害が大きく響き、作況が86と全国最低になりました。新潟もまた、95と100を下回り、魚沼に次ぐ人気産地の佐渡においては64とほぼ壊滅的な状況の一方で、太平洋側では宮城が108、茨城や千葉で107と作柄で、昨年の日照不足とは逆の産地状況になりました。

このような状況を受け、「秋田あきたこまちの需要が宮城ひとめぼれに移る」「新潟コシヒカリの不足を福島コシヒカリで補う動きが出る」などの対応もではじめています。前年産の高騰と急落で米卸に損失が発生し、流通在庫も抱えている状況なので価格が大きく上がる状況にないと予想されます。

しかし、15年産の不作で、古米入りのブレンド米が大量に市場に出回り、消費者の「**産地**」に対する執着心は薄らいだようにも見えます。しかし新潟・コシヒカリといったブランドの力は大きく、産地による値段の格差がより大きくなる年なとも思えます。